

妖婆

芥川龍之介



あなたは私の申し上げる事を御信じにならないかも知れません。いや、きつと嘘だと御思いなさるでしょう。昔なら知らず、これから私の申し上げる事は、大正の昭代にあつた事なのです。しかも御同様住み慣れている、この東京にあつた事なのです。外へ出れば電車や自動車走っている。内へはいればしつきりなく電話のベルが鳴っている。新聞を見れば同盟罷工や婦人運動の報道が出ている。——そう云う今日、この大都会の一隅でポオヤホフマンの小説にでもありそうな、気味の悪い事件が起つたと云う事は、いくら私が事実だと申した所で、御信じになれないのは御尤もです。が、その東京の町々の燈火が、幾百万あるにしても、日没と共に蔽いかかる夜をことごとく焼き払って、昼に返す訣には行きません。ちやうどそれと同じように、無線電信や飛行機がいかに自然を征服したと云つても、その自然の奥に潜んでいる神秘的世界の地図までも、引く事が出来たと云う次第ではありません。それならどうして、この文明の日光に照らされた東京にも、平常は夢の中にのみ跳梁する精霊たちの秘密な力が、

時と場合とでアウエルバッツハの審のような不思議を現じないと云えましょう。時と場合どころではありません。私に云わせれば、あなたの御注意次第で、驚くべき超自然的な現象は、まるで夜咲く花のように、始終我々の周囲にも出没去来しているのです。たとえば冬の夜更などに、銀座通りを御歩きになつて見ると、必ずアスファルトの上に落ちて集る紙屑が、数にしておよそ二十ばかり、一つ所に集まつて、くるくる風に渦を巻いているのが、御眼に止まる事でしょう。それだけなら、何も申し上げるほどの事はありませんが、ためしにその紙屑が渦を巻いている所を、勘定して御覧なさい。必ず新橋から京橋までの間に、左側に三個所、右側に一個所あつて、しかもそれが一つ残らず、四つ辻に近い所ですから、これもあるいは気流の関係だとしても、申し申せない事はありますまい。けれどももう少し注意して御覧になると、どの紙屑の渦の中にも、きつと赤い紙屑が一つある——活動写真の広告だとか、千代紙の切れ端だとか、乃至はまた燐寸の商標だとか、物はいろいろ変えていても、赤い色が見え

るのは、いつでも変りがありません。それがまるでほかの紙屑カクシを率ひるように、一しきり風が動いたと思うと、まつさきにひらりと舞上ります。と、かすかな砂煙の中から囁くような声が起つて、そこここに白く散らかつていた紙屑が、たちまちアスファルトの空へ消えてしまう。消えてしまうのじやありません。一度にさつと輪を描いて、流れるように飛ぶのです。風が落ちる時もその通り、今まで私が見た所では、赤い紙が先へ止まりました。こうなるといかにあなたでも、御不審が起らずにはいられますまい。私は勿論不審です。現に二三度は往来へ立ち止まつて、近くの飾窓ショウウインドウから、大幅の光がさす中に、しつきりなく飛びまわる紙屑を、じつと透かして見た事もありません。実際その時はそうして見たら、ふだんは人間の眼に見えない物も、夕暗にまぎれるこもり蝙蝠こうもりほどは、臃ぼろげにしろ、彷彿ほうふつと見えそうな気がしたからです。

が、東京の町で不思議なのは、銀座通りに落ちてゐる紙屑ばかりじやありません。夜更けて乗る市内の電車でも、時々尋常の考に及ばない、妙な出来

事に遇うものです。その中でも可笑おかしいのは人気がない町に行く赤電車や青電車が、乗る人もない停留場へちやんと止まる事でしょう。これも前の紙屑同様、疑わしいと御思いになつたら、今夜でもためして御覧なさい。同じ市内の電車でも、動坂線どうさかせんと巢鴨線すがもせんと、この二つが多いようですが、つい四五日前の晩も、私の乗つた赤電車が、やはり乗降りのない停留場へぱつたり止まつてしまつたのは、その動坂線の団子坂だんごさか下です。しかも車掌がベルの綱へ手をかけながら、半ば往来の方へ体を出して、例のごとく「御乗りですか。」と声をかけたじやありませんか。私は車掌台のすぐ近くにいましたから、すぐに窓から外を覗いて見ました。と、外は薄雲のかかつた月の光が、朦朧もうろうと漂つてゐるだけで、停留場の柱の下は勿論、両側の町家がごとごとく戸とを鎖した、真夜中の広い往来にも、さらに人間らしい影は見えません。妙なと思ふ途端、車掌がベルの綱を引いたので、電車はそのまま動き出しましたが、それでもまだ窓から外を眺めていると、停留場が遠くなるのに従つて、今度は何となく私の眼にも、その月

の光の中に、だんだん小さくなつて行く人影があるような気がしました。これは申すまでもなく、私の神経の迷かもしれませんが、あの先を急ぐ赤電車の車掌が、どうして乗る人もない停留場へ電車を止めなどしたのでしよう。しかもこんな目に遇つたのは、何も私ばかりじゃなく、私の知人の間にも、三四人はいようと云うのです。して見ると、まさか電車の車掌がその度に寝惚けたとも申されずまい。現に私の知人の一人などは、車掌をつかまえて、「誰もいないじゃないか。」と、きめつけると、車掌も不審そうな顔をして、「大勢さんのように思いましたか。」と、答えた事があるそうです。

そのほかまだ数え立てれば、砲兵工廠の煙突の煙が、風向きに逆つて流れたり、撞く人もないニコライの寺の鐘が、真夜中に突然鳴り出したり、同じ番号の電車が二台、前後して日の暮の日本橋を通りすぎたり、人つこ一人いない国技館の中で、毎晩のように大勢の喝采が聞えたり、——所謂「自然の夜の側面」は、ちょうど美しい蛾の飛び交うように、この繁華な東京の町々にも、絶え間なく姿を現している

のです。従つてこれから私が申し上げようと思う話も、実はあなたが御想像になるほど、現実の世界と懸け離れた、徹頭徹尾あり得べからざる事件と云う次第ではありません。いや、東京の夜の秘密を一通り御承知になつた現在なら、無下にはあなたも私の話を、莫迦になさる筈はありますまい。もしまたしまいまで御聞きになつた上でも、やはり鶴屋南北以来の焼酎火の匂がするようだったら、それは事件そのものに嘘があるせいと云うよりは、むしろ私の申し上げ方が、ポオやホフマンの墨を摩すほど、手に入つていない罪だろうと思ひます。何故と云えば一二年以前、この事件の当事者が、ある夏の夜私と差向いで、こうこう云う不思議に出遇つた事がある

と、詳しい話をしてくれた時には、私は今でも忘れられないほど、一種の妖気とも云うべき物が、陰々として私たちのまわりを立て罩めたような気がしたのですから。

この当事者と云う男は、平常私の所へ出入をする、日本橋辺のある出版書肆の若主人で、ふだんは用談さえすませてしまうと、匆匆帰つてしまうので

すが、ちようどその夜は日の暮からさつと一雨か
かったので、始は雨止みを待つ心算でも、いつに
なく腰を落着けたのでしよう。色の白い、眉の迫つ
た、瘦せぎすな若主人は、盆提灯へ火のはいつた縁
先のうす明りにかしこまって、かれこれ初夜も過ぎ
る頃まで、四方山の世間話をして行きました。その
世間話の中へ挟みながら、「是非一度これは先生に
聞いて頂きたいと思つて居りましたが。」と、ほと
んど心配そうな顔色で徐に口を切つたのが、申すま
でもなく本文の妖婆の話だったので。私は今で
もその若主人が、上布の肩から一なすり墨をぼかし
たような夏羽織で、西瓜の皿を前にしながら、まる
で他聞でも憚るように、小声でひそひそ話し出した
容子が、はつきりと記憶に残っています。そう云え
ばもう一つ、その頭上の盆提灯が、豊かな胸へ秋
草の模様をほんのりと明く浮かせた向うに、雨上り
の空がむら雲をだだ黒く一面に乱していたのも、や
はり妙に身にしみて、忘れる事が出来ません。

そこで肝腎の話と云うのは、その新蔵と云う若主
人が（ほかに差障りがあるといけませんから、仮に

こう呼んで置きましょう。）二十三の夏にあつた事
で、当時本所一つ目辺に住んでいた神下しの婆の所
へ、ちと心配な筋があつて、伺いを立てに行つたと
云う、それが抑々の発端なのです。何でも六月の上
旬ある日、新蔵はあの界限に呉服屋を出している、
商業学校時代の友だちを引張り出して、一しよに
与兵衛館へ行つたのだそうですが、そこで一杯やつ
ている内に、その心配な筋と云うのを問わず語りに
話して聞かせると、その友だちの泰さんと云うのが
急に真面目な顔をして、「じやお島婆さんに見て貰
い給え。」と、熱心に勧め出しました。そこで仔細を
聞いて見ると、この神下しの婆と云うのは、二三年
以前に浅草あたりから今の所へ引越して来たので、
占もすれば加持もする——それがまた飯綱でも使う
のかと思うほど、靈頭があると云うのです。「君も
知つているだろう。ついこの間魚政の女隠居が身投
げをした。——あの屍骸がどうしても上らなかつた
んだが、お島婆さんにお札を貰つて、それを一の橋
から川へ抛りこむと、その日の内に浮いて出たじや
ないか。しかも御札を抛りこんだ、一の橋の橋杭の

所にさ。ちようど日の暮の上げ潮だったが、仕合せとあすこにもやっていた、一石船の船頭が見つけて

ね。さあ、御客様だ、土左衛門だと云う騒ぎで、早速橋詰の交番へ届けたんだらう。僕が通りかかった時にや、もう巡査が来ていたが、人ごみの後から覗いて見ると、上げたばかりの女隠居の屍骸が、荒菰をかぶせて寝かしてある、その菰の下から出た、水ぶくれの足の裏には、何だと思う、君？ あの御札がぴったり斜すつかけに食附いていたんだ。僕はさすがにぞつとしたね。」——と云う友だちの話を聞いた時には、新蔵もやはり背中が寒くなって、夕潮の色だの、橋杭の形だの、それからその下に漂っている女隠居の姿だの——そんな物が一度に眼の前へ、浮んで来たような気がしたそうです。が、何しろ一杯機嫌で、「そりや面白い。是非一つ見て貰おう。」と、負惜しみの膝を進めました。「じゃ僕が案内しよう。この間金談を見て貰いに行つて以来、今じやあの婆さんとも大分懇意になつているから。」「何分頼む。」——こう云う調子で、脚くわえ楊枝ようじのまま与兵衛を出ると、麦むぎ葉は帽子ぼうしに梅雨晴の西日をよけて、夏

外套の肩を並べながら、ぶらりとその神下しの婆の所へ出かけたと云います。

ここでその新蔵の心配な筋と云うのを御話しますと、家に使つていた女中の中に、お敏としと云う女があつて、それが新蔵とは一年越互に思い合つていたのですが、どうした訣わけか去年の暮に叔母の病氣を見舞いに行つたぎり、音沙汰もなくなつてしまつたのです。驚いたは新蔵ばかりでなく、このお敏に目をかけていた新蔵の母親も心配して、請人うけいんを始め伝手でんてから伝手へ、手を廻して探しましたが、どうしても行く方が分りません。やれ、看護婦になつているのを見たの、やれ、妾めかけになつたと云う噂があるのと、取沙汰だけはいろいろあつても、さて突きつめた所になると、皆目かひもくどうなつたか知れないのです。新蔵は始氣きづか遣つて、それからまた腹を立てて、この頃ではただぼんやりと沈んでいるばかりになりましたが、その元氣のない容子が、薄々ながら二人の關係を感じていた母親には、新しい心配の種になつたのでしよう。芝居へやる。湯治を勧める。あるいは商売附合いの宴会へも父親の名代を勤めさせる

——と云つた具合に骨を折つて、無理にも新蔵の浮かない気分を引き立てようとし始めました。そこでその日も母親が、本所界隈の小売店を見廻らせると云うのは口実で、実は気晴らしに遊んで来いと云わないばかり、紙入の中には小遣いの紙幣まで入れてくれましたから、ちようど東両国に幼馴染があるのを幸、その泰さんと云うのを引張り出して、久しぶりに近所の与兵衛鮎へ、一杯やりに行つたのです。

こう云う事情がありましたから、お島婆さんの所へ行くと云つても、新蔵のほろ酔の腹の底には、どこか真剣な所があつたのでしよう。一つ目の橋の袂を左へ切れて、人通りの少い豎川河岸を二つ目の方へ一町ばかり行くと、左官屋と荒物屋との間に挟まつて、竹格子の窓のついた、煤だらけの格子戸造りが一軒ある——それがあの神下しの婆の家だと聞いた時には、まるでお敏と自分との運命が、この怪しいお島婆さんの言葉一つできまりそうな、無気味な心もちが先に立つて、さっきの酒の酔などは、すつかりもう醒めてしまったそうです。また実際そのお島婆さんの家と云うのが、見たばかりでも氣

が滅入りそうな、庇の低い平家建で、この頃の天氣に色の出た雨落ちの石の青苔からも、菌ぐらゐは生えるかと思ふぐらゐ、妙にじめじめしていました。その上隣の荒物屋との境にある、一抱あまりの葉柳が、窓も蔽うほど枝垂れていますから、瓦にさえ暗い影が落ちて、障子一重隔てた向うには、さもただならない秘密が潜んでいそうな、陰森としたけはいがあつたと云います。

が、泰さんは一向無頓着に、その竹格子の窓の前へ立止ると、新蔵の方を振返つて、「じやいよいよ鬼婆に見参と出かけるかな。だが驚いちやいけな いぜ。」と、今更らしい嚇しを云うのです。新蔵は勿論嘲笑つて、「子供じやあるまいし。誰が婆さんくらいに恐れるものか。」と、うつちやるように答えましたが、泰さんは反つてその返事に人の悪るような眼つきを返しながら、「何さ。婆さんを見たんじや驚くまいが、ここには君なんぞ思いもよらない、別嬪が一人いるからね。それで御忠告に及んだんだよ。」と、こう云う内にもう格子へ手をかけて、「御免。」と、勢の好い声を出しました。するとすぐ

に「はい。」と云う、含み声の答があつて、そつと障子を開けながら、入口の柵に膝をついたのは、憐しい十七八の娘です。成程これじゃ、泰さんが、「驚くな」と云つたのも、さらに不思議はありません。色の白い、鼻筋の透つた、生際の美しい細面で、殊に眼が水々しい。——が、どこかその顔立ちにも、痛々しい窶れが見えて、撫子を散らしためりんすの帯さえ、派手な紺紵の単衣の胸をせめそうな気がしたそうです。泰さんは娘の顔を見ると、麦藁帽子を脱ぎながら、「阿母さんは？」と尋ねました。すると娘は術なさそうな顔をして、「生憎出まして留守でございますが。」と、さも自分が悪い事でもしたように、睨を染めて答えましたが、ふと涼しい眼を格子戸の外へやると、急に顔の色が變つて、「あら。」と、かすかに叫びながら、飛び立とうとしたじやありませんか。泰さんは場所が場所だけに、さては通り魔でもしたのかと思つたそうですが、慌てて後を振り返ると、今まで夕日の中に立っていた新蔵の姿が見えません。と、二度びつくりする暇もなく、泰さんの袂にすがつたのは、その神下しの婆の

娘で、それが息をはずませながら、一生懸命な声で云うのを聞くと、「あなた。今の御連れ様にどうかそう仰有つて下さいまし。二度とこの近所へ御立寄りなすつちやいけません。さもないと、あの方の御命にも関るような事が起りますから。」と、こう切れ切れに云うのだそうです。泰さんは何が何やら、まるで煙に捲かれた体で、しばらくはただ呆氣にとられていましたが、とにかく、言伝てを頼まれた体なので、「よろしい。確かに頼まりました。」と云つたきり、よくよく狼狽したのでしよう。麦藁帽子もぶら下げたまま、いきなり外へ飛び出すと、新蔵の後を追いかけて、半町ばかり駆け出しました。

その半町ばかり離れた所が、ちようど寂しい石河岸の前で、上の方だけ西日に染まつた、電柱のほかに何も無い——そこに新蔵はしよんぼりと、夏外套の袖を合せて、足元を眺めながら、佇んでいました。が、やつと駆けつけた泰さんが、まだ胸が躍っていると云う調子で、「冗談じゃないぜ。驚くなど云つた僕の方が、どのくらい君に驚かされたか知れやしない。一体君はあの別嬪を——」と云いかける

と、新蔵はもう一つ目橋の方へ落着かない歩みを運びながら、「知っていると。あれが君、お敏なんだ。」と、興奮した声で答えたそうです。泰さんは三度びつくりした——びつくりした筈でしょう。何しろこれからその行方を見て貰おうと云う当の女が、人もあろうにお島婆さんの娘だと云う騒ぎなのですから。と云つて泰さんもその娘に頼まれた、容易ならない言伝ての手前、驚いてばかりもいられますまい。そこで麦藁帽子をかぶるが早いかな、二度とこの界限へは近づくなと云うお敏の言葉を、声色同様に饒舌しゃべつて聞かせました。新蔵はその言葉を静に聞いていましたが、やがて眉を蹙しかめると、迂散うさんらしい眼つきをして、「来てくれるなど云うのはわかるけれど、来れば命にかかわると云うのは不思議じゃないか。不思議よりやむしろ乱暴だね。」と、腹を立てたような声を出すのです。が、泰さんもただ言伝てを聞いただけで、どうした訣わけとも問ひ質たさずに、お島婆さんの家を駈け出したのですから、いくら相手を慰めたくも、好い加減な御座なりを並べるほかは、慰めようがありません。すると新蔵はな

おさらの事、別人のように黙りこんで、さつさと歩みを早めたそうですが、その内にまた与兵衛鮫の旗の出ている下へ来ると、急に泰さんの方をふり向いて、「僕はお敏に逢つてくりや好かつた。」と、残念らしい口吻を洩しました。その時泰さんが何気なく、「じゃもう一度逢いに行くさ。」と、調戯からかうようにこう云つた——それが後になつて考えると、新蔵の心に燃えている、焰のような逢いたさへ、油をかける事になつたのでしよう。ほどなく泰さんに別れると、すぐ新蔵が取つて返したのは、回向院えこういん前の坊主軍鶏ぼうずしやもで、あたりが暗くなるのを待ちながら、銚子も二三本空にしました。そうして日がとつぷり暮れると同時に、またそこを飛び出して、酒臭い息を吐きながら、夏外套の袖を後へ刎はねて、押しかけたのはお敏の所——あの神下しの婆の家です。

それが星一つ見えない、暗の夜で、悪く地息じいきが蒸れる癖に、時々ひやりと風が流れる、梅雨中にありがちな天気でした。新蔵は勿論中つ腹で、お敏の本心を聞かない内は、ただじゃ帰らないくらいな氣組でしたから、墨を流した空に柳が聳たかえて、その下に

竹格子の窓が灯をともした、底気味悪い家の容子にも頓着せず、いきなり格子戸をがらりとやると、狭い土間に突立つて、「今晚は。」と一つ怒鳴ったそうです。その声を聞いたばかりでも、誰だろくらいいな推量はすぐについたからでしょう。あの優しい含み声の返事も、その時は震えていたようですが、やがて静に障子が開くと、梱越しに手をついた、やつやつしいお敏の姿が、次の間からさす電燈の光を浴びて、今でも泣いているかと思うほど、悄悄とそこへ現れました。が、こちらは元より酒の上で、麦藁帽子を阿弥陀にかぶったまま、邪慳にお敏を見下しながら、「ええ、阿母さんは御在宅ですか。手前少々見て頂きたい事があつて、上つたんですが、——御覧下さいますか、いかがなもんでしよう。御取次。」と、白々しくずつきり云つた。——それがどのくらいつらかつたのでしよう、お敏はやはり手をついたまま、消え入りたそうに肩を落して、「はい。」と云つたぎりしばらくは涙を呑んだようでした。が、もう一度新蔵が虹のような酒気を吐いて、「御取次。」と云おうとすると、襖を隔てた次の間から、

まるで墓が眩くように、「どなたやらん、そこな人。遠慮のうちへ通らつしやれ。」と、力のない、鼻へ抜けた、お島婆さんの声が聞えました。そこな人も凄じい。お敏を隠した発頭人。まずこいつをとつちめて、——と云う権幕でしたから、新蔵はずいと上りざまに、夏外套を脱ぎ捨てると、思わず止めようとしたお敏の手へ、麦藁帽子を残したなり、昂然と次の間へ通りました。が、可哀そうなのは後に残つたお敏で、これは境の襖の襖側にぴつたりと身を寄せたまま、夏外套や麦藁帽子の始末をしようとする方角もなく、涙ぐんだ涼しい眼に、じつと天井を仰ぎながら、華奢な両手を胸へ組んで、頻りに何か祈念でも凝らしているように見えたそうです。

さて次の間へ通つた新蔵は、遠慮なく座蒲団を膝へ敷いて、横柄にあたりを見廻すと、部屋は想像していた通り、天井も柱も煤の色をした、見すばらしい八畳でしたが、正面に浅い六尺の床があつて、婆娑羅大神と書いた軸の前へ、御鏡が一つ、御酒徳利が一对、それから赤青黄の紙を刻んだ、小さな幣束が三四本、恭しげに飾つてある、——その左手

の縁側の外は、すぐに豎川の流でしょう。思いなしか、立て切った障子に響いて、かすかな水の音が聞えました。さて肝腎の相手はと見ると、床の前を右へ外して、菓子折、サイダア、砂糖袋、玉子の折なごの到来物が、ずらりと並んでいる筆筒の下に、大柄な、切髪の、鼻が低い、口の大きな、青ん膨れに膨れた婆が、黒地の単衣の襟を抜いて、睫毛の疎な目をつぶって、水気の来たような指を組んで、魍魎のごとくのつさりと、畳一ぱいに坐っていました。さつきこの婆のものを云う声が、墓の眩くようだったと云いましたが、こうして坐っているのを見ると、墓も墓、容易ならぬ墓の怪が、人間の姿を装って、毒気を吐こうとしているとても形容しそうな気色ですから、これにはさすがの新蔵も、頭の上の電燈さえ、光が薄れるかと思うほど、凄しげな心もちがして来たそうです。

が、勿論それくらいな事は、重々覚悟の前でしたから、「じゃ一つ御覧を願いたい。縁談ですがね。」と、きつぱり云った。——その言葉が聞えないのか、お島婆さんはやと薄眼を開いて、片手を耳へ

当てながら、「何の、縁談の。」と繰返しましたが、やはり同じようなぼやけた声で、「おぬし、女が欲しいでの。」と、のつけから鼻で笑ったと云います。新蔵はじりじり業の煮えるのをこらえながら、「欲しいからこそ、見て貰うんです。さもなけりや、誰がこんな——」と、柄にもない鉄火な事を云って、こちらにも負けずに鼻で笑いました。けれども婆は自若として、まるで蝙蝠の翼のように、耳へ当てた片手を動かしながら、「怒らしやるまいてや。口が悪いはわしが癖じやての。」と、まだ半ばせせら笑うように、新蔵の言葉を遮りましたが、それでもようやく調子を改めて、「年はの。」と、仔細らしく尋ねたそうです。「男は二十三——酉年です。」「女はの。」「十七。」「卯年よの。」「生れ月は——」「措かっしやい。年ばかりでも知りようての。」婆はこう云いながら、二三度膝の上の指を折って、星でも数えるようでしたが、やがて皮のたるんだ眶を挙げて、ぎよろりと新蔵へ眼をくれると、「成らぬてや。成らぬてや。大凶も大凶よの。」と、まず大仰に嚇かして、それからまた独り眩くように、「この縁を結

んだらの、おぬしにもせよ、女にもせよ、必ず一人は身を果そうじゃ。」と、云い切つたろうじやありませんか。かつとしたのは新蔵で、さてこそ命にかかわると云つたのは、この婆の差金だろうと、見てとつたから、我慢が出来ません。じりりと膝を向け直すと、まだ酒臭い顔をしゃやくつて、「大凶結構。男が一度惚れたからにや、身を果すくらいは朝飯前です。火難、剣難、水難があつてこそ、惚れ栄えもあると御思いなさい。」と、嵩にかかつて云い放しました。すると婆はまた薄眼になつて、厚い唇をもぐもぐ動かしながら、「なれども、男に身を果された女はどうじゃ。まいてよ、女に身を果された男はの、泣こうてや。吼えようてや。」と、嘲笑うような声で云うのです。おのれ、お敏の体に指一本でもさして見ろ——と氣負つた勢いで、新蔵は婆を睨めつけながら、「女にや男がついています。」と、真向からきめつけると、相手は相不変手を組んだまま、悪く光沢のある頬をにやりとやつて、「では男にはの。」と、嘯くように問い返しました。その時は思わずぞつとしたと、新蔵が後で話しましたが、

これは成程あの婆に果し状をつけられたようなものですから、氣味が悪かつたのには、相違ありません。しかもそう問い返した後で、婆は新蔵のひるんだ氣色を見ると、黒い単衣の襟をぐいと抜いて、「いかにおぬしが拙ろうともの、人間の力には天然自然の限りがあるてや。悪あがきは思い止らつしやれ。」と、猫撫声を出しましたが、急にもう一度大きな眼を仇白く見開いて、「それ、それ、証拠は目のあたりじゃ。おぬしにはあのため息が聞えぬかいの。」と、今度は両手を耳へ当てながら、さも一大事らしく囁いたと云うのです。新蔵は我知らず堅くなつて、じつと耳を澄ませましたが、襖一重向うに隠れている、お敏のけはいを除いては、何一つ聞えるものもありません。すると婆は益々眼をぎよろつかせて、「聞えぬかいの。おぬしのような若いのが、そこな石河岸の石の上で、ついているため息が聞えぬかいの。」と、次第に後の筆筒に映つた影も大きくなるかと思うほど、膝を進めて来ましたが、やがてその婆臭い匂が、新蔵の鼻を打つたと思うと、障子も、襖も、御酒徳利も、御鏡も、筆筒も、

座蒲団も、すべて陰々とした妖気の中に、まるで今までとは打つて変つた、怪しげな形を現して、「あの若いのおおぬしのように、おのが好色心に目が眩んでの、この婆に憑らせられた婆娑羅の大神に逆うたてや。されば立ち所に神罰を蒙つて、瞬く暇に身を捨ちようでの。おおぬしには善い見せしめじや。聞かつしやれ。」と云う声が、無数の蠅の羽音のように、四方から新蔵の耳を襲つて来ました。その拍子に障子の外の豎川へ、誰とも知れず身を投げた、けたたましい水音が、宵闇を破つて聞えたそうです。これに荒胆を挫がれた新蔵は、もう五分とその場に居たたまれず、捨台辞を残すのもそこそこで、泣いているお敏さえ忘れたように、踰躑とお島婆さんの家を飛び出しました。

さて日本橋の家へ歸つて、明るる日起きぬけに新聞を見ると、果して昨夜豎川に身投げがあつた。——それも亀沢町の樽屋の息子で、原因は失恋、飛びこんだ場所は、一の橋と二の橋との間にある石河岸と出ているのです。それが神経にこたえたのでしょう。新蔵は急に熱が出て、それから三日ばか

りと云うものは、ずっと床についていました。が、寝ても気にかかるのは、申すまでもなくお敏の事で、勿論今となつて見れば、何も相手が心變りをしたと云う訣じやなく、突然暇をとつたのも、二度とこの界限へ来てくれるなど云つたのも、皆お島婆さんの作略に相異なるのですから、今更のようにお敏を疑つたのが恥しくもなつて来ますし、また一方ではこの自分に何の怨も無いお島婆さんが、何故そんな作略をめぐらすのだから、不思議で仕方がなかつたそうです。それにつけても一人一人身投げをさせて見ているような、鬼婆と一しよにいろのじや、今にもお敏は裸のまま、婆娑羅の大神が祭つてある、あの座敷の古柱へ、ぐるぐる巻に括りつけられて、松葉燻じぐらいにはされ兼ねますまい。そう思うともう新蔵は、おちおち寝てもいられないような気がしますから、四日目には床を離れるが早いのか、ともかくにも泰さんの所へ、知慧を借りに出かけようとする、ちようどそこへその泰さんの所から、電話がかかつて来たじゃありませんか。しかもその電話と云うのが、ほかならないお敏の一件で、聞け

は昨夜遅くなつてから、泰さんの所へお敏が来た。そうして是非一度若旦那に御目にかかつて、委細の話をしたいのだが、以前奉公していた御店へ、電話もまさかかけられないから、あなたに言伝ことづてを頼みたい——と云う用向きだったそうです。逢いたいのは、こちらと同じ思いですから、新蔵はほとんど送話器にすがりつきそんな勢いで、「どこで逢うと云うんだらう。」と、一生懸命に問いかけますと、能弁な泰さんは、「それがさ、」とゆつくり前置きをして、「何しろあんな内気な女が、二三度会つたばかりの僕の所へ、尋ねて来ようと云うんだから、よくよく思い余つての上なんだらう。そう思うと、僕もすつかりつまされてしまつてね、すぐに待合をとも考えたんだが、婆の手前は御湯へ行くと云つて、出て来るんだと聞いて見りや、川向うは少し遠すぎるし——と云つてほかに然るべき所もないから、よろしい、僕の所の二階を明渡しませうつて云つたんだが、余り恐れ入りますからとか何とか云つて、どうしても承知しない。もつともこりや気兼ねをするのも、無理はないと思つたから、じゃどこかにお前

さんの方に、心当りの場所でもありませんかかつて尋ねると、急に赤い顔をしたがね。小さな声で、明日の夕方、近所の石河岸いしがしまで若旦那様に来て頂けないでしょうかと云うんだ。野天の逢いびきの逢曳は罪がなくなつて好い。」と、笑を噛み殺した容子ようすでした。が、元より新蔵の方は笑う所の騒ぎじゃなく、「じゃ石河岸ときましたんだね。」と、もどかしそうに念を押すと、仕方がないから、そうきめて置いた、時間は六時と七時との間、用が済んだら、自分の所へも寄つてくれと云う返事です。新蔵は礼と一しよに承知の旨を答えると、早速電話を切りましたが、さあそれから日の暮までが、待遠しいの、待遠しくないのじゃありません。算盤そろばんを弾く。帳合さしずいを手伝う。中元の進物の差図さしずをする。——その合間には、じれつたような顔をして、帳場格子の上にある時計の針ばかり気にしていました。

そう云う苦しい思いをして、やつと店をぬけ出したのは、まだ西日の照りつける、五時少し前でした。が、その時妙な事があつたと云うのは、小僧の一人が揃ひよりけえて出した日和下駄ひよりけを突かけて、新刊書類の建

看板が未^に生乾きのペンキの勻を漂わしている後から、アスファルトの往来へひよいと一足踏み出すと、新蔵のかぶっている麦藁帽子の庇をかすめて、蝶が二羽飛び過ぎました。烏羽揚羽と云うのでしよう。黒い翅の上に気味悪く、青い光沢がかかった蝶なのです。勿論その時は格別気にもしないで、二羽とも高い夕日の空へ、揉み上げられるようになって見えなくなるのを、ちらりと頭の上に仰ぎながら、折よく通りかかった上野行の電車へ飛び乗ってしまいました。さて須田町で乗換えて、国技館前で降りて見ると、またひらひらと麦藁帽子にまつわるのは、やはり二羽の黒い揚羽でした。が、まさか日本橋からここまで蝶が跡をつけて、来ようなどとは考えませんから、この時もやはり気にとめずに、約束の刻限にはまだ余裕もあろうと云うので、あれから一つ目の方へ曲る途中、看板に藪とある、小綺麗な蕎麦屋を一軒見つけて、仕度旁々はいったさうです。もつとも今日は謹んで、酒は一滴も口にせず、妙に胸が悶えるのを、やつと冷麦を一つ平げて、往来的日足が消えた時分、まるで人目を忍ぶ落人のよ

うに、こつそり暖簾から外へ出ました。するとその外へ出た所を、追いつぐごとくさつと来て、おやと思う鼻の先へ一文字に舞い上つたのは、今度も黒天鷲絨の翅の上に、青い粉を刷いたような、一對の烏羽揚羽なのです。その時は気のせいか、額へ羽搏つた蝶の形が、冷やかに澄んだ夕暮の空気を、烏ほどの大きさに切抜いたかと思いましたが、ぎよつとして思わず足を止めると、そのまますつと小さくなって、互にからみ合いながら、見る見る空の色に紛れてしまいました。重ね重ねの怪しい蝶の振舞いに、新蔵もさすがに怯気がさして、悪く石河岸なぞへ行つて立つていたら、身でも投げたくなりはないかと、二の足を踏む気さえ起つたと云います。が、それだけまた心配なのは、今夜逢いに来るお敏の身の上ですから、新蔵はすぐに心をとり直すと、もう黄昏の人影が蝙蝠のようにちらほらする回向院前の往来を、側目もふらずまっすぐに、約束の場所へ駆けつけました。所が駆けつけるともう一度、御影の狛犬が並んでいる河岸の空からふわりと来て、青光りのする翅と翅とがもつれ合ったと思う間

もなく、蝶は二羽とも風になぐれて、まだ薄明りの残っている電柱の根元で消えたさうです。

ですからその石河岸の前をぶらぶらして、お敏の来るのを待つている間も、新蔵は気が氣じやありません。麦藁帽子をかぶり直したり、袂へ忍ばせたま計を見たり、小一時間と云うものは、さつき店の帳場格子の後にいた時より、もつと苛立たしい思いをさせられました。が、いくら待ってもお敏の姿が見えないので、我知らず石河岸の前を離れながら、お島婆さんの家の方へ、半町ばかり歩いて来ると、右側に一軒洗湯があつて、大きく桃の実を描いた上に、万病根治桃葉湯と唐めかした、ペンキ塗りの看板が出ています。お敏が湯に行くのを口実に、家を出ると云つたのは、この洗湯じやないかと思う。——ちやうどその途端に女湯の暖簾をあげて、夕闇の往来へ出て来たのは、紛れもないお敏でした。なりはこの間と変りなく、撫子模様のめりんすの帯に紺紵の単衣でしたが、今夜は湯上りだけに血色も美しく、銀杏返しいちょうがえの鬢びんのあたりも、まだ濡れているのかと思うほど、艶々と櫛目を見せています。それが

濡手拭と石鯨の箱とをそつと胸へ抱くようにして、何が怖いのか、往来の右左へ心配そうな眼をくぼりましたが、すぐに新蔵の姿を見つけたのでしよう。まだ氣づかわしそうな眼でほほ笑むと、つと蓮葉はすつばに男の側へ歩み寄つて、「長い事御待たせ申しまして。」と便なささうに云いました。「何、いくらも待ちやしない。それよりお前、よく出られたね。」新蔵はこう云いながら、お敏と一しよに元来た石河岸の方へゆつくり歩き出しましたが、相手はやはり落着かない容子で、そわそわ後ばかり見返りますから、「どうしたんだ。まるで追手でもかかりそうな風じやないか。」と、わざと調戲からかうように声をかけますと、お敏は急に顔を赤らめて、「まあ私、折角いらしつて下すつた御礼も申し上げないで——ほんとうによく御出で下さいました。」と、それでも不安らしく答えるのです。そこで新蔵も気がかりになつて、あの石河岸へ来るまでの間に、いろいろ仔細を尋ねましたが、お敏はただ苦しそうな微笑を洩らして、「こうしている所が見つかつて御覽なさいまし。私ばかりかあなたまで、どんな恐しい目に御

遇いになるか知れたものではございませんよ。」と、それだけの返事しかしてくれません。その内にもう二人は、約束の石河岸の前へ来かかりましたが、お敏は薄暗がりにつくぼっている御影の狛犬へ眼をやると、ほつと安心したような吐息をついて、その下

をだらだらと川の方へ下りて行くと、根府川石が何本も、船から挙げたまま寝かしてある——そこまで来て、やつと立止つたそうです。恐る恐るその後から、石河岸の中へはいつた新蔵は、例の狛犬の陰になつて、往来の人目にかからないのを幸、夕じめりのした根府川石の上へ、無造作に腰を下しながら、「私の命にかかわるの、恐しい目に遇うのつて、一体どうしたと云う訣なんだい。」と、またさつき返事を促しました。するとお敏はしばらくの間、蒼黒く石垣を浸している豎川の水を見渡して、静に何か口の内で祈念しているようでしたが、やがてその眼を新蔵に返すと、始めて、嬉しそうに微笑して、「もうここまで来れば大丈夫でございますよ。」と、

囁くように云うじやありませんか。新蔵は狐にまつまされたような顔をして、無言のままお敏の顔を見

返しました。それからお敏が、自分も新蔵の側へ腰をかけて、途切れ勝にひそひそ話し出したのを聞くと、成程二人は時と場合で、命くらいは取られ兼ねない、恐しい敵を控えているのです。

元来あのお島婆さんと云うのは、世間じや母親のように思つていますが、実は遠縁の叔母とかで、お敏の両親が生きていた内は、つき合ひさえしなかつたものだそうです。何でも代々宮大工だつたお敏の父親に云わせると、「あの婆は人間じやねえ。嘘だと思つたら、横つ腹を見ろ。魚の鱗が生えてやがるじゃねえか。」とかで、往来でお島婆さんに遇つたと云つても、すぐに切火を打つたり、浪の花を撒いたりするくらいでした。が、その父親が歿くなつて間もなく、お敏には幼馴染で母親には姪に当る、ある病身な身なし児の娘が、お島婆さんの養女になつたので、自然お敏の家とあの婆の家との間にも、親類らしい往来が始まつたのです。けれどもそれさえほんの一二年で、お敏は母親に死なれると、世話をする兄弟もなかつたので、百ヶ日もまだすまない内に、日本橋の新蔵の家へ奉公する事になりました

から、それぎりお島婆さんとも交渉が絶えてしまいました。そう云うあの婆の所へ、どうしてまたお敏が行くようになったかは、後で御話する事にしましょう。

ところでお島婆さんの素性はと云うと、歿くなった父親にでも聞いて見たらともかく、お敏は何も知りませんが、ただ、昔から口寄せの巫女をしていたと云う事だけは、母親か誰かから聞いていました。が、お敏が知ってからは、もう例の婆婆羅の大神と云う、怪しい物の力を借りて、加持や占をしていたそうです。この婆婆羅の大神と云うのが、やはりお島婆さんのように、何とも素性の知れない神で、やれ天狗だの、狐だのと、いろいろ取沙汰もありましたが、お敏にとつては産土神うぶすながみの天満宮の神主などは、必ず何か水府のものに相違ないと云つていました。そのせいもお島婆さんは、每晚二時の時計が鳴ると、裏の縁側から梯子はしこ伝いに、豎川の中へ身を浸して、ずつぷり頭まで水に隠したまま、三十分あまりもはいつている——それもこの頃の陽気ばかりだと、さほどこたえはしませんまいが、寒中でもやはり

湯巻き一つで、紛々と降りしきる霧みぞれの中を、まるで人面の獺このように、ざぶりと水へはいると云うじゃありませんか。一度などはお敏が心配して、電燈を片手に雨戸を開けながら、そつと川の中を覗いて見たら、向う岸の並蔵の屋根に白々と雪が残っているだけ、それだけ余計黒い水の上に、婆の切髪の頭だけが、浮巢のように漂つていたそうです。その代りこの婆のする事は、加持でも占でも験げんがある——と云うと、善い方ばかりのようですが、この婆に金を使つて、親とか夫とか兄弟とかを呪のろい殺したのも大勢いました。現にこの間この石河岸から身を投げた男なぞも、同じ柳橋の芸者とかに思をかけたある米問屋の主人の頼みで、あの婆が造作もなく命を捨てさせてしまったのだそうです。が、どう云う秘密な理由があるのか、一人でもそこで呪い殺された、この石河岸のような場所になると、さすがの婆の加持祈祷でも、そのまわりにいる人間には、害を加える事が出来ません。のみならず、そこでしている事は、千里眼同様な婆の眼にも、はいらずにすむようですから、それでお敏は新蔵を、わざわざこの石河

岸へ呼び寄せたと云う次第なのです。

ではどう云う訣わけでお島婆さんが、それほどお敏と新蔵との恋の邪魔をするかと云いますと、この春頃から相場の高低を見て貰いに來るある株屋が、お敏の美しいの目をつけて、大金を餌えさにあの婆を釣つた結果、妾めかけにする約束をさせたのだそうです。が、それだけなら、ともかくも金で埒らちの開く事ですが、ここにもう一つ不思議な故障があるのは、お敏を手離すと、あの婆が加持も占も出来なくなる。——と云うのは、お島婆さんがいざ仕事にとりかかるとなると、まずその婆婆羅の大神をお敏の体に祈り下して、神憑かみがかりになったお敏の口から、一々差函を仰ぐのだそうです。これは何もそうしなくとも、あの婆自身が神憑りになったらよきさうに思われますが、そう云う夢とも現うつともつかない恍惚こうこうの境にはいったものは、その間こそ人の知らない世界の消息にも通じるものの、醒めたが最後、その間の事はすっかり忘れてしまいますから、仕方がなくお敏に神を下して、その言葉を聞くのだとか云う事でした。こう云う事情がある以上、あの婆がお敏を手離さないの

も、まずもつともと云わなければなりません。ところが株屋の方はまたそれがつけ目なので、お敏を妾にする以上、必ずお島婆さんもついて來るに相違ありませんから、そこでこれには相場を占わせて、あわよくば天下を取ろうと云う、色と欲とにかけた腹らしいのです。

が、お敏の身になつて見れば、いかに夢現ゆめうつの中で云う事にしろ、お島婆さんが悪事を働くのは、全く自分の云いつけ通りにするのですから、良心がなければ知らない事、こんな道具に使われるのは空恐しいのに相違ありません。そう云えば前に御話ししたお島婆さんの養女と云うのも、引き取られるからこの役に使われ通しで、ただでさえ脾弱ひよわのが益々病身になつてしまいました。が、とうとうしまいには心の罪に責められて、あの婆の寝ている暇に、首を縊くつて死んだと云う事です。お敏が新蔵の家から暇をとつたのは、この養女が死んだ時で、可哀そうにその新仏が幼馴染のお敏へ宛てた、一封の書置きがあつたのを幸、早くもあの婆は後釜にお敏を据えようと思つたのでしよう。まんまとそれを種に暇を

貰わせて、今の住居へおびき寄せると、殺しても主人の所へは帰さないと、強面こわおもてに云い渡してしまつたそうです。が、勿論新蔵と堅い約束の出来ていたお敏は、その晩にも逃げ帰る心算つもりだつたそうですが、向うも用心していたのでしょうか。度々入口の格子戸を窺うかがつても、必ず外に一匹の蛇が大きなどぐるを巻いているので、到底一足も踏み出す勇氣は、起らなかつたと云う事です。それからその後も何度となく、隙を狙つては逃げ出しにかかる、やはり似たような不思議があつて、どうしても本意が遂げられません。そこでこの頃は仕方がなく何も因縁事と詮めて、泣く泣くお島婆さんの云いなり次第になつていました。

ところがこの間新蔵が来て以来、二人の關係が知れて見ると、日頃非道なあの婆が、お敏を責めるの責めないのじやありません。それも打つたりつねつたりするばかりか、夜更けを待つては怪しげな法を使つて、両腕を空ざまに吊し上げたり、頸のまわりへ蛇をまきつかせたり、聞くさえ身の毛のよ立つような、恐しい目にあわせるのです。が、それより

もさらにつらいのは、そう云う折檻せつかんの相間あいまに、あの婆あやむらがにやりと嘲笑つて、これでも思い切らなければ、新蔵の命を縮めても、お敏は人手に渡さないと、憎々しく嚇おどす事でした。こうなるとお敏も絶体絶命ですから、今までは何事も宿命と覺悟をきめていたのが、万一新蔵の身の上に、取り返しのつかない事でも起つては大変と、とうとう男に一部始終を打ち明ける氣になつたのです。が、それも新蔵が委細を聞いた後になつて、そう云う恐しい事をする女かと、嫌いもし蔑さげすみもしそうでしたから、いよいよ泰たいさんの所へ駈けつけるまでには、どのくらい思い迷つたか、知れないほどだつたと云う事でした。

お敏はこう話し終ると、またいつものように蒼白くなつた顔を挙げて、じつと新蔵の眼を見つめながら、「そう云う因果な身の上なのでございますから、いくらつらくつても悲しくつても、何もなかつた昔と詮めて、このまま——」と云いかけてましたが、もう我慢が出来なくなつたと見えて、男の膝へすがつたなり、袖を噛んで泣き出しました。途方とほうに暮れたのは新蔵で、しばらくはただお敏の背をさすりなが

ら、叱つたり励ましたりしていたものの、さてあのお島婆さんを向うにまわして、どうすれば無事に二人の恋を遂げる事が出来るかと云うと、残念ながら勝算は到底ないと云わなければなりません。が、勿論お敏のためにも弱味を見すべき場合ではないので、無理に元気の好い声を出しながら、「何、そんなに心配おしでない。長い間にはまた何とか分別もつこうと云うものだから。」と、一時のがれの慰めを云いますと、お敏はようやく涙をおさめて、新蔵の膝を離れましたが、それでもまだ潤み声で、「それは長い間でしたら、どうにかならない事もございませぬまいが、明後日の夜はまた家の御婆さんが、神を下すと云つて居りましたもの。もしその時私がふとした事でも申しましたら——」と、術なさそうに云うのです。これには新蔵も二度吐胸とむねを衝いて、折角のつけ元氣さえ、全く沮喪そそうせずにはいられませんでした。明後日と云えば、今日明日の中に、何とか工夫くふうをめぐらさなければ、自分は元よりお敏まで、とり返しつかない不幸の底に、沈淪しなければなりません。が、たった二日の間に、どうしてあ

怪しい婆を、取つて抑える事が出来ましよう。たとい警察へ訴えたにしろ、幽冥ゆうめいの世界で行われる犯罪には、法律の力も及びませぬ。そうかと云つて社会の輿論よろんも、お島婆さんの悪事などは、勿論晒わらうべき迷信として、不問に附してしまふでしょう。そう思うと新蔵は、今更のように腕を組んで、茫然とするよりほかはありませんでした。そう云う苦しい沈黙が、しばらくの間続いた後で、お敏は涙ぐんだ眼を挙げると、仄ほかに星の光っている暮方の空を眺めながら、「いつそ私は死んでしまいたい。」と、かすかな声で呟つぶきましたが、やがて物に怯おびえたように、怖々おそおそあたりを見廻して、「余り遅くなりますと、また家の御婆さんに叱られますから、私はもう帰りましょう。」と、根も精もつき果てた人のように云うのです。成程そう云えばここへ来てから、三十分は確かに経ちましたろう。夕闇は潮の勻なまと一しよに二人のまわりを立て罩こめて、向う河岸がしの薪たきぎの山も、その下に繋つないである苦船くるふねも、蒼茫たる一色に隠れながら、ただ豎川の水ばかりが、ちようど大魚の腹のように、うす白くうねうねと光っています。新蔵はお

敏の肩を抱いて、優しく唇を合せてから、「ともかくも明日の夕方には、またここまで来ておくれ。私もそれまでには出来るだけ、知慧を絞つて見る心算だから。」と、一生懸命に力をつけました。お敏は頬の涙の痕をそつと濡手拭で拭きながら、無言のまま悲しそうに頷きましたが、さて悄悄根府川石から立上つて、これも萎れ切つた新蔵と一しよに、あの御影の狛犬の下を寂しい往来へ出ようとする、急にまた涙がこみ上げて来たのでしよう。夜目にも美しい襟足を見せて、せつなそうにうつむきながら、「ああ、いつそ私は死んでしまいたい。」と、もう一度かすかにこう云いました。するとその途端です。さつき二羽の黒い蝶が消えた、例の電柱の根元の所に、大きな人間の眼が一つ、髻髯として浮び出したじやありませんか。それも睫毛のない、うす青い膜がかかったような、瞳の色の濁っている、どこを見ているともつかない眼で、大きさはかれこれ三尺あまりもありましたろう。始は水の泡のようにふつと出て、それから地の上を少し離れた所へ、漂うごとくぼんやり止りましたが、たちまちそのどろりとし

た煤色の瞳が、斜に背の方へ寄つたそうです。その上不思議な事には、この大きな眼が、往来を流れる闇ににじんで、朦朧とあつたのに関らず、何とも云いようのない悪意の閃きを蔵しているように見えませんでした。新蔵は思わず拳を握つて、お敏の体をかばいながら、必死にこの幻を見つめたと言います。實際その時は総身の毛穴へ、ことごとく風がふきこんだかと思うほど、ぞつと背筋から寒くなつて、息さえつまるような心もちだったのでしよう。いくら声を立てようと思つても、舌が動かなかつたと云う事でした。が、幸その眼の方でも、しばらくは懸命の憎悪を瞳に集めて、やはりこちらを見返すようでしたが、見る見る内に形が薄くなつて、最後に貝殻のような眶が落ちると、もうそこには電柱ばかりで、何も怪しい物の姿は見えません。ただ、あの烏羽揚羽のような物が、ひらひら飛び立ったように見えたそうです。が、それは事によると、地を掠めた蝙蝠だったかも知れますまい。その後で新蔵とお敏とは、まるで悪い夢からでも醒めたように、うつとり色を失つた顔を見合しましたが、たちまち互の眼の中に

恐しい覚悟の色を読み合うと、我知らずしつかり手をとり交して、わなわな身ぶるいしたと云う事です。

それから三十分ばかり経った後、新蔵はまだ眼の色を変えたまま、風通しの好い裏座敷で、主人の泰さんを前にしながら、今夜出合ったさまざまな不思議な事を、小声でひそひそと話していました。二羽の黒い蝶の事、お島婆さんの秘密の事、大きな眼の幻の事——すべてが現代の青年には、荒唐無稽こうとうむけいとしか思われぬ事ですが、兼ねてあの婆の怪しい呪力じゆりきを心得ている泰さんは、さらに疑念を挟む気色もなく、アイスクリームを薦めながら、片唾かたずを呑んで聞いてくれるのです。「その大きな眼が消えてしまふと、お敏はまっ蒼な顔をして、『どうしましよ。ここであなたと御目にかかったのが、もう御婆さんに知れてしまいました。』と云うんだ。が、僕は『こうなったが最後、あの婆と我々との間には、戦争が始まったのも同様なんだから、知れようが知れまいが、かまうもんか。』って威張ったんだがね。困った事には今も話した通り、僕は明日またあ

の石河岸で、お敏と落合う約束がしてあるだろう。ところが今夜の出合いがああ婆に見つかつたとなると、恐らく明日はお敏を手放して、出さないだろうと思うんだ。だからよしんばあ婆の爪の下から、お敏を救い出す名案があつてもだね、おまけにその名案が今日明日中に思いついたにしてもだ。明日の晩お敏に逢えなけりや、すべての計画が画餅がへいになる訣わけだろう。そう思つたら、僕はもう、神にも仏にも見放されたような心もちがしてね。お敏に別れてここへ来るまでの間も、まるで足は地に着いていないような心もちだつた。」——新蔵はこう委細いさいを話し終ると、思い出したように団扇うちわを使いながら、心配そうに泰さんの顔を窺うかがいました。が、泰さんは存外驚かずに、しばらくはただ軒先の釣葱つりしおぶが風にまわるのを見ていましたが、ようやく新蔵の方へ眼を移すと、それでもちよいと眉をひそめて、「つまり君が目的を達するにや、三重の難関がある訣だね。第一に君はお島婆さんの手から、安全にだね、安全にお敏さんを奪い取らなければならぬ。第二にそれも明後日までには、是非共実行する必要がある。

それからその実行上の打合せをするために、明日中にお敏さんに逢つて置きたい、——と云うのが第三の難関だろう。そこでこの第三の難関はだね。第一第二の難関さえ切り抜けられりや、どうにでもなると思うんだ。」と、自信があるらしい口調で云うのです。新蔵はまだ浮かない顔をしたまま、「どうして？」と、疑わしそうに尋ねました。すると泰さんは面憎いほど落着いた顔をして、「何、訣はありやしない。君が逢えなけりや——」と云いかけました。が、急にあたりを見廻しながら、「こうつと、こりやいざと云う時まで伏せて置こう。どうもさつきからの話じゃ、あの婆め、君のまわりへ嚴重に網を張つていらしいから、うっかりした事は云わない方が好きそうだ。実は第一第二の難関も破つて破れなくはなさそうに思うんだが。——まあ、まあ、万事僕に任せて置くさ。それより今夜は麦酒でも飲んで、大いに勇気を養つて行き給え。」と、しまいにはさも氣楽らしい笑に紛まぎらしてしまふじやありませんか。新蔵は勿論それを、もどかしくも腹立たしくも思いませんが、さてその麦酒が始まつて見ると、やはり

泰さんの用心がもつともだつたと思うような事が起りました。と云うのは二人の間に浮かない世間話が始まつてから、ふと泰さんが気がつくつと、燻いぶし鮭さけの小皿と一しよに、新蔵の膳に載つて居るコップがもう泡の消えた黒麦酒をなみなみと湛たえたまま、口もつけずに置いてあります。そこで泰さんが水の垂れる麦酒ビール罎びんの尻をとつて、「さあ、ちつと陽気に干そうじやないか。」と、相手を促した時の事でした。何気なくそのコップをとり上げた新蔵が、ぐいと一息に飲むとすると、直径二寸ばかりの円を描いた、つらりと光る黒麦酒の面に、天井の電燈や後の葺戸よしどが映つている——そこへ一瞬間、見慣れない人間の顔が映つたのです。いや、もつと精密に云えばただ見慣れない顔と云うだけで、人間かどうかもはっきりとはわかりません。こちらの考え方一つでは、鳥とでも、獣とでも、乃至なは蛇や蛙とでも、思つて思えない事はないのです。それも顔と云うよりは、むしろその一部分で、殊に眼から鼻のあたりが、まるで新蔵の肩越しにそつとコップの中を覗いたかのごとく、電燈の光を遮かつて、ありありと影を落し

ました。こう云うと長い間の事のようにですが、前にも云つた通りほんの一瞬間で、何とも判然しない物の眼が、直径二寸の黒麦酒の円の中から、ちらりと新蔵の眼を窺つたと思うと、たちまち消え失せてしまつたのです。新蔵は飲もうとしたコップを下へ置いて、きよろきよろ前後を見廻しました。が、電燈も依然として明るければ、軒先の釣苺も相不変風に廻つていて、この涼しい裏座敷には、さらに妖臭を帯びた物も見当りません。「どうした。虫でもはいつたんじやないか。」——こう泰さんに尋ねられた新蔵は、仕方なく額の汗を拭つて、「何、妙な顔がこの麦酒に映つたんだ。」と、恥しそうに答えました。これを聞くと泰さんは、「妙な顔が映つた?」と反響のように繰返しながら、新蔵のコップを覗きこみましたが、元より今はそう云う泰さんの顔のほかに、顔らしいものは何も映りません。「君の神経のせいじやないか。まさかあの婆も、僕の所までは手を出しやしなからう。」「だつて君は今も自分でそう云つたじやないか。僕の体のまわりにや、抜け目なくあの婆が網を張つているからつて。」「大きにそ

うだつて。だがまさか——まさかその麦酒のコップへ、あの婆が舌を入れて、一口頂戴したつて次第でもなからう。それならかまわないから、干してしまひ給え。」——こう云う具合に泰さんは、いろいろ沈んだ相手の気を引き立てようとはしましたが、新蔵は益々ふさぐ一方で、とうとうそのコップも干さない内に、もう帰り仕度をし始めました。そこで泰さんもやむを得ず、呉々も力を落さないようにと、再三親切な言葉を添えてから、電車では心もとない云うので、車まで云いつけてくれたそうです。

その晩は寝ても、妙な夢ばかり見て、何度となくうなされましたが、それでもようやく朝になると、新蔵は早速泰さんの所へ、昨夜の礼旁々電話をかけた。すると電話に出て来たのは、泰さんの店の番頭で、「旦那は今朝ほど早く、どちらかへ御出かけになりました。」と云う挨拶なのです。新蔵はもしやお島婆さんの所へでも、行つたのじやないかと思いましたが、打ち明けてそう尋ねる訣にも行かず、また尋ねたにした所で、余人の知つてゐる筈もありませんから、帰り匆匆知らせてくれるように

と、よく番頭に頼んで置いて、一まず電話を切つてしまいました。所がかれこれ午近くになると、今度は泰さんから電話がかかつて来て、案の定今朝お島婆さんの所へ、家相を見て貰いに行つたと云うのです。「幸、お敏さんに会つたからね、僕の計画だけは手紙にして、そつとあの人の手に握らせて来たよ。返事は明日でなくつちやわからないが、何しろ非常の場合だから、お敏さんも振つて引受けそうなものだ。」——こう云う泰さんの言葉を聞いていると、いかにも万事が好都合に運びそうな気がしますから、いよいよ新蔵はその計画と云うのが知りたくなつて、「一体何をどうする心算なんだ。」と尋ねますと、泰さんはやはり昨夜のように、電話でもにやにや笑つている容子で、「まあ、もう二三日待ち給え。あの婆が相手じゃ、電話だつて油断がならないからね。じゃいずれた僕の方から、電話をかける事にしよう。さようなら。」と云う始末なので、電話を切つた新蔵は、いつもの通りその後で、帳場格子の後へ坐りましたが、さあここ二日の間に自分とお敏との運命がきまるのだと思つと、心細い

ともつかず、もどかしいともつかず、そうかと云つて猶更また嬉しいともつかず、ただ妙にわくわくした心もちになつて、帳面も算盤も手につきません。そこでその日は、まだ熱がとれないようだと言つて口実に、午から二階の居間で寝ていました。が、その間でも絶えず気になつたのは、誰かが自分の一挙一動をじつと見つめているような心もちで、これは寝ていると起きているとに關らず、執念深くつきまとつていたそうです。現に午過ぎの三時頃には、確かに二階の梯子段の上り口に、誰か蹲つているものがあつて、その視線が葭戸越しに、こちらへ向けられていたようでしたから、すぐに飛び起きて、そこまで出て行つて見ましたが、ただ磨きこんだ廊下の上に、ぼんやり窓の外の空が映っているだけで、何も人間らしいものは見えませんでした。

こう云う具合でその翌日になると、益々新蔵は気がでなくなつて、泰さんの電話がかかるのを今か今かと待つていましたが、ようやく昨日と同じ刻限になつて、約束通り電話口へ呼び出されました。しかし出て見ると泰さんは、昨日よりさらに元氣の好

い声で、「とうとう君、お敏さんの返事があつてね、一切僕の計画通り実行する事になつたよ。何、どうして返事を受取つた？ また用を拵えて、僕自身あの婆の所へ出馬したのさ。すると昨日手紙で頼んであるから、取次に出たお敏さんが、すぐに僕の手へ返事を忍ばせたんだ。可愛い返事だぜ。平仮名で『しょうちいたしました』と書いてある——」と、得意らしく弁じ立てるのです。ところが今日は妙な事に、こう云う言葉の途中から、泰さんの声ばかりでなく、もう一人誰かの声がいりました。もつともこの声と云うのも、何と云つているのだから、言葉は皆目わからないのですが、とにかく勢いの好い泰さんの声とは正反対に、鼻へかかった、力のない、喘ぐような、まだるい声が、ちようど陰と日向とのように泰さんの饒舌つて行く間を縫つて、受話器の底へ流れこむのです。始めの内は新蔵も、混線だろうくらいな量見で、別に気にもしませんでしたから、「それから、それから。」と促し立てて、懐しいお敏の消息を、夢中になつて聞いていました。が、その内に泰さんにも、この妙な声が聞えたのでしよう。

「何だか騒々しいな。君の方がい。」と尋ねますから、「いや僕の方じゃない。混線だろう。」と答えますと、泰さんはちよいと舌打ちをした気色で、「じゃ一度切つて、またかけ直すぜ。」と云いながら、一度所か二度も三度も、交換手に小言を云つちや、根氣よく繋ぎ直させましたが、やはり蠢の眩くような、ぶつぶつ云う声が聞えるのです。泰さんもしまいは我を折つて、「仕方がないな。どこかに故障があるんだろう。——が、それより肝腎の本筋だがね、いよいよお敏さんが承知したとなりや、まあ、万々計画通り成功するだろうと思うから、安心して吉報を待つてい給え。」と、またさっきの話を続け出しましたが、新蔵はやはり泰さんの計画と云うのが気になるので、もう一遍昨日のように、「一体何をどうする心算なんだ。」と尋ねますと、相手は例のごとく澄ましたもので、「もう一日辛抱し給え。明日の今時分までにや、きつと君にも知らせられるだろうと思うから。——まあ、そんなに急がないで、大船に乗つた気で待つているさ。果報は寝て待つて云うじゃないか。」と、冗談まじりに答えました。す

るとその声はまだ終らない内に、もう一つのぼやけた声が急に耳の側へ来て、「悪あがきは思い止らつしやれや。」と、はつきり嘲笑あざわらつたじやありませんか。泰さんと新蔵とは思わず同時に両方から、「何だ、今の声は。」と尋ね合いましたが、それぎり受話器の中はひっそりして、あの眩くような鼻声さえ全く聞えなくなつてしまいました。「こりやいけない。今のは君、あの婆だぜ。悪くすると、折角の計画も——まあ、すべてが明日の事だ。じゃこれで失敬するよ。」——こう云いながら、電話を切つた泰さんの声の中には、明かに狼狽ろうばいしたけはいが感じられました。また実際お島婆さんが、二人の間の電話にさえ気を配るようになったとすると、勿論泰さんとお敏とが秘密の手紙をやりとりしているにも、目をつけているのに相違ありませんから、泰さんの慌てるのもつともなのです。まして新蔵の身になつて見れば、どうする心算か知らないにもせよ、とにかくかけ換のない泰さんの計画が、あの婆に裏かを掻かれる以上、それこそ万事休してしまうよりほかはありません。ですから新蔵は電話口を離れると、

まるで喪心そうしんした人のように、ぼんやり二階の居間へ行つて、日が暮れるまで、窓の外の青空ばかり眺めていました。その空にも気のせいかな、時々あの忌むしい烏羽揚うはあげ羽はが、何十羽となく群を成して、気味の悪い更紗さらさら模様を織り出した事があるようですが、新蔵はもう体も心もすっかり疲れ果てていましたから、その不思議を不思議として、感じる事さえ出来なかつたと云います。

その晩もまた新蔵は悪夢ばかり見続けて、碌々ろくろく眠る事さえ出来ませんでした。それでも夜が明けると、幾分か心に張りが出ましたので、砂を噛むより味の無い朝飯をすませると、早速泰さんへ電話をかけました。「莫迦ばかに、早いじやないか。僕のような朝寝坊の所へ、今時分電話をかけるのは残酷ざんくだよ。」——泰さんは実際まだ眠むような声で、こう苦情を申し立てましたが、新蔵はそれには返事もしないで、「僕はね、昨日の電話の一件があつて以来、とても便々と家にやいられないからね。これからすぐに君の所へ行くよ。いいえ、電話で君の話を聞いたくらいじゃ、とても気が休まらないんだ。好いかい。

すぐに行くからね。」と、だだっ子のように云い張つたそうです。この興奮し切つた口調を聞いて、泰さんもほかに仕方がなかつたのでしよう。「じや来給え。待つているから。」と、素直に答えてくれたので、新蔵は電話を切るが早い、心配そうな母親にもむずかしい顔を見せただけで、どこへ行くとも断らずに、ふいと店を飛び出しました。出て見ると、空はどんよりと曇つて、東の方の雲の間に赤銅色の光が漂つている、妙に蒸暑い天気でしたが、元よりそんな事は気にかける余裕もなく、すぐ電車へ飛び乗つて、すいているのを幸と、まん中の座席へ腰を下したそうです。すると一時恢復したように見えた疲労が、意地悪くまだ残つていたのか、新蔵は今更のように気が沈んで、まるで堅い麦藁帽子が追々頭をしめつけるのかと思うほど、烈しい頭痛までして来ました。そこで気を紛せたい一心から、今まで下駄の爪先ばかりへやつていた眼を、隣近所へ挙げて見ると、この電車にもまた不思議があつた。

——と云うのは、天井の両側に行儀よく並んでいる吊皮が、電車の動揺するのにつれて、皆振り子のよ

うに揺れていますが、新蔵の前の吊皮だけは、始終じつと一つ所に、動かないでいるのです。それも始は可笑しいなくらいな心もちで、深くは気にも止めませんでしたが、その内にまた誰かに見つめられているような、気味の悪い心もちが自然に強くなり出したので、こんな吊皮の下に坐つてるのが、いけないのだろうと思ひましたから、向う側の隅にある空席へわざわざ移りました。移つて、ふと上を見ると、今まで揺られていた吊皮が突然造りつけたように動かなくなつて、その代りさっきの吊皮が、さも自由になつたのを喜ぶらしく、勢いよくぶらつき始めたじやありませんか。新蔵は毎度の事ながら、この時もやはり頭痛さえ忘れるほど、何とも云えない恐怖を感じて、思わず救いを求めるごとく、ほかの乗客たちの顔を見廻しました。と、斜に新蔵と向ひ合つた、どこかの隠居らしい婆さんが一人、黒絹の被布の襟を抜いて、金縁の眼鏡越しにじろりと新蔵の方を見返したのです。勿論それはあの神下しの婆なぞとは何の由縁もない人物だつたのには相違ありませんが、その視線を浴びると同時に、新蔵はたち

まちお島婆さんの青んぶくれの顔を思い出しましたから、もう矢も楯もたまりません。いきなり切符を車掌へ渡すと、仕事を仕損じた掏摸すりより早く、電車を飛び降りてしまいました。が、何しろ凄まじい速度で、進行していた電車ですから、足が地についたと思うと、麦藁帽子が飛ぶ。下駄ひざがしらの鼻緒はなおが切れる。その上俯向きに前へ倒れて、膝頭ひざがしらを摺すり剥むくと云う騒ぎです。いや、もう少し起きるのが遅かったら、砂煙を立てて走って来た、どこかの貨物自動車に、轆ひかれてしまった事でしょう。泥だらけになった新蔵は、ガソリンの煙を顔に吹きつけて、横なぐれに通りすぎた、その自働車の黄色塗の後に、商標らしい黒い蝶の形を眺めた時、全く命拾いをしたのが、神業のような気がしたそうです。

それが鞍掛橋くらかけばしの停留場へ一町ばかり手前でしたが、仕合せと通りかかった辻車が一台あったので、ともかくもその車へ這い上ると、まだ血相を変えたまま、東両国へ急がせました。が、その途中も動悸どうつきはするし、膝頭の傷はずき痛むし、おまけに今の騒動があった後ですから、いつ何時この車もひつ

くり返りかねないような、縁起の悪い不安もあるし、ほとんど生きている空はなかったそうです。殊に車が両国橋へさしかかった時、国技館の天に臙銀おぼろぎんの縁をとった黒い雲が重なり合つて、広い大川の水面に蛭蝶しじみの翼のような帆影が群っているのを眺めると、新蔵はいよいよ自分とお敏との生死の分れ目が近づいたような、悲壮な感激に動かされて、思わず涙さえ浮めました。ですから車が橋を渡つて、泰さんの家の門口へやつと梶棒を下した時には、嬉しかのか、悲しいのか、自分にも判然しないほど、ただ無性に胸が迫つて、げげんな顔をしている車夫の手へ、方外ほうがいな賃金を渡す間も惜しいように、倉皇そうこうと店先の暖簾のれんをくぐりました。

泰さんは新蔵の顔を見ると、手をとらないばかりにして、例の裏座敷へ通しましたが、やがてその手足の創痕きずあとだの、綻びほつの切れた夏羽織だのに気がついたものと見えて、「どうしたんだい。その体裁は。」と、呆れたように尋ねました。「電車から落つこつてね、鞍掛橋の所で飛び降りをしそくなつたもんだから。」「田舎者いなかものじゃあるまいし、——気が利かない

にも、ほどがあるぜ。だが何だつてまた、あんな所で、飛び降りなんぞしたんだろう。」——そこで新蔵は電車の中で出会つた不思議を、一々泰さんに話して聞かせました。すると泰さんは熱心にその一部始終を聞き終つてから、いつになく眉をひそめて、「形勢いよいよ非だね。僕はお敏さんが失敗したんじゃないかと思うんだが。」と独り言のように云うのです。新蔵はお敏の名前を聞くと、急にまた動悸が高まるような気がしましたから、「失敗したんじゃないかかつて？ 君は一体お敏に何をやらせようとしたんだ。」と、詰問するごとく尋ねました。けれども泰さんはその問には答えないで、「もつともこうなるのも僕の罪かも知れないんだ。僕がお敏さんへ手紙を渡した事なんぞを、電話で君にしやべらなかつたら、あの婆も僕の計画には感づかずにしたのに違いないんだからな。」と、いかにも当惑したらしいため息さえ洩らすのです。新蔵はいよいよたまらなくなつて、「今になつてもまだ君の計画を知らせてくれないと云うのは、あんまり君、残酷じやないか。そのおかげで僕は、二重の苦しみをしなけ

りやならないんだ。」と、声を震わせながら怨じ立てると、泰さんは「まあ。」と抑えるような手つきをして、「そりや重々もつともだよ。もつともだと云う事は僕もよく承知しているんだが、あの婆を相手にしている以上、これも已むを得ない事だと思つてくれ給え。現に今も云つた通り、僕はお敏さんへ手紙を渡した事も、君に打明けずに黙つていたら、もつと万事都合に、運んだかも知れないと思つているんだ。何しろ君の一言一動は、皆、お島婆さんに見透しらしいからね。いや、事によると、この間の電話の一件以来、僕も随分あの婆に睨まれていないもんでもない。が、今までの所じや、とにかく僕には君ほどの不思議な事件も起らないんだから、實際僕の計画が失敗したのかどうか、それがはつきり分るまでは、いくら君に恨まれても、一切僕の胸一つにおさめて置きたいと思うんだ。」と、諭したり慰めたりしてくれました。が、新蔵はそう聞いた所で、泰さんの云う事には得心出来ても、お敏の安否を気使う心に変りのある筈はありませんから、まだ険しい表情を眉の間に残したまま、「それにし

も君、お敏の体間違ひのあるような事はないだろうね。」と、突つかかるように念を押すと、泰さんもやはり心配そうな眼つきをして、「さあ。」と云つたぎり、しばらくは思案に沈んでいましたが、やがてちよいと次の間の柱時計を覗きながら、「僕もそれが気になって仕方がないんだ。じゃあの婆の家へは行かないでも、近所まで偵察に行つて見ようか。」と、思い切つたらしく云うのです。新蔵も実は悠長にこうして坐りこんでいるのが、気が気でなかつた所ですから、勿論いやと言う筈はありません。そこですぐに相談が纏つて、ものの五分と経たない内に、二人は夏羽織の肩を並べながら、匆々泰さんの家を出ました。

所が泰さんの家を出て、まだ半町と行かない内に、ばたばた後から駈けて来るものがありますから、二人とも、同時に振返つて見ると、別に怪しいものではなく、泰さんの店の小僧が一人、蛇の目を一本肩にかついで、大急ぎで主人の後を追いかけて来たのです。「傘か。」「へえ、番頭さんが降りそうですから御持ちなさいまして云いました。」「そんな

らお客様の分も持つてくりや好いのに。」——泰さんは苦笑しながら、その蛇の目を受取ると、小僧は生意気に頭を搔いてから、とつてつけたように御辞儀をして、勢いよく店の方へ駈けて行つてしまひました。そう云えば成程頭の上にはさつきよりも黒い夕立雲が、一面にむらむらと滲み渡つて、その所々を洩れる空の光も、まるで磨いた鋼鉄のような、氣味の悪い冷たさを帯びているのです。新蔵は泰さんと一しよに歩きながら、この空模様を眺めると、また忌わしい予感に襲われ出したので、自然相手との話もはずまず、無暗に足ばかり早め出しました。ですから泰さんは遅れ勝ちで、始終小走りに追いついては、さも氣忙しそうに汗を拭いていましたが、その内にとうとうあきらめたのでしよう。新蔵を先へ立たせたまま、自分は後から蛇の目の傘を下げて、時々友だちの後姿を氣の毒そうに眺めながら、ぶらぶら歩いて行きました。すると二人が一の橋の袂を左へ切れて、お敏と新蔵とが日暮に大きな眼の幻を見た、あの石河岸の前まで来た時、後から一台の車が来て、泰さんの傍を走り抜けましたが、その車の

上の客の姿を見ると、泰さんは急に眉をひそめて、「おい、おい。」と、けたたましく新蔵を呼び止めるじやありませんか。そこで新蔵もやむを得ず足を止めて、不承不承に相手を見返りながら、うるさそうに「何だい。」と答えると、泰さんは急ぎ足に追いついて、「君は今、車へ乗って通った人の顔を見たかい。」と、妙な事を尋ねるのです。「見たよ。瘦せた、黒い色眼鏡をかけている男だろう。」——新蔵はいぶかしそうにこう云いながら、またさつさと歩き出しましたが、泰さんはさらにひるまないで、前よりも一層重々しく、「ありやね、君、僕の家の上華客で、鍵惣つて云う相場師だよ。僕は事によるとお敏さんを妾にしたいと云っているのは、あの男じやないかと思うんだがどうだろう。いや、格別何故つて訣もないんだが、ふとそんな気がし出したんだ。」と、思いもよらない事を云い出しました。が、新蔵はやはり沈んだ調子で、「気だけだろう。」と云い捨てたまま、例の桃葉湯の看板さえ眺めもせず歩いて行くのです。と、泰さんは蛇の目の傘で二人の行く方を指さしながら、「必ずしも気だけじや

ないよ。見給え。あの車はお島婆さんの家の前へ、ちゃんと止っているじやないか。」と得意らしく新蔵の顔を見返しました。見ると実際さっきの車は、雨を待つている葉柳が暗く条を垂らした下に、金紋のついた後をこちらへ向けて、車夫は蹴込みの前に腰をかけているらしく、悠々と楯棒を下ろしているのです。これを見た新蔵は、始めて浮かぬ顔色の底に、かすかな情熱を動かしながら、それでもまだ懶げな最初の調子を失わないで、「だがね、君、あの婆に占を見て貰いに来る相場師だつて、鍵惣とかのほかにもいるだろうじやないか。」と面倒臭そうに答えましたが、その内にもうお島婆さんの家と隣り合つた、左官屋の所まで来かかったからでしょう。泰さんはその上自説も主張しないで、油断なくあたりをくまびりながら、まるで新蔵の身をかばうように、夏羽織の肩を摺り合せて、ゆっくり、お島婆さんの家の前を通りすぎました。通りすぎながら、二人が尻眼に容子を窺うと、ただふだんと変つてゐるのは、例の鍵惣が乗つて来た車だけで、これは遠くで眺めたのよりもずっと手前、ちようど左官屋の

水口の前に太ゴムの轍を威かつく止めて、バツトの吸殻を耳にはさんだ車夫が、もつともそうに新聞を読んでいます。が、そのほかは竹格子の窓も、煤けた入口の格子戸も、乃至はまだ葭戸にも変らない、格子戸の中の古ぼけた障子の色も、すべてがいつもと変らないばかりか、家内もやはり日頃のように、陰森とした静かさが罩もつているように思われました。まして万一を僥倖して来た、お敏の姿らしいものは、あのしおらしい紺緋の袂が、ひらめくのさえ眼にはいりません。ですから二人はお島婆さんの家の前を隣の荒物屋の方へ通りぬけると、今までの心の緊張が弛んだと云う以外にも、折角の当てが外れたと云う落胆まで背負わずにはいられませんでした。

ところがその荒物屋の前へ来ると、浅草紙、亀の子束子、髪洗粉などを並べた上に、蚊やり線香と書いた赤提燈が、一ぱいに大きく下っている——その店先へ佇んで、荒物屋のお上さんと話しているのは、紛れもないお敏だろうじやありませんか。二人は思わず顔を見合せると、ほとんど一秒もためら

わずに、夏羽織の裾を翻しながら、つかつかと荒物屋の店へはいました。そのけはいに気がついて、二人の方を振り向いたお敏は、見る見る蒼白い頬の底にほのかな血の色を動かしましたが、さすがに荒物屋のお上さんの手前も兼ねなければならなかったのでしょう。軒先へ垂れている柳の条を肩へかけたまま、無理に胸の躍るのを抑えるらしく、「まあ。」とかすかな驚きの声を洩らしたとか云う事です。すると泰さんは落着き払って、ちよいと麦藁帽子の庇へ手をやりながら、「阿母さんは御宅ですか。」と、さりげなく言葉をかけました。「はあ、居ります。」で、あなたは？」「御客様の御用で半紙を買いに——」——こう云うお敏の言葉が終らない内に、柳に塞がれた店先が一層うす暗くなつたと思ふとたちまち蚊やり線香の赤提燈の胴をかすめて、きらりと一すじ雨の糸が冷たく斜に光りました。と同時に柳の葉も震えるかと思うほど、どろどろと雷が鳴つたそうです。泰さんはこれを切っかけに、一足店の外へ引返しながら、「じゃちよいと阿母さんにそう云つて下さい。私がまた見てお貰い申したい

事があつて上りましたつて——今も御門先で度々御免と声をかけたんだが、一向音沙汰がないんでね、どうしたのかと思つたら、肝腎の御取次がここで油を売つていたんです。」と、お敏と荒物屋のお上さんとを等分に見比べて、手際よく快活に笑つて見せました。勿論何も知らない荒物屋のお上さんは、こう云う泰さんの巧な芝居に、気がつく筈もありませんから、「じゃお敏さん、早く行つてお上げなさいよ。」と、気忙わしそうに促すと、自分も降り出した雨に慌てて、蚊やり線香の赤提燈を匆々とりこめに立つたと云います。そこでお敏も、「じゃ叔母さん、また後程。」と挨拶を残して、泰さんと新蔵とを左右にしながら、荒物屋の店を出しましたが、元より三人ともお島婆さんの家の前には足も止めず、もう点々と落ちて来る大粒な雨を蛇の目に受けて、一つ目の方へ足を早めました。実際その何分かの間は、本人同志は云うまでもなく、平常は元気の好い泰さんさえ、いよいよ運命の賽を投げて、丁か半かをきめる時が来たような気がしたでしょう。あの石河岸の前へ来るまでは、三人とも云い合せたよう

に眼を伏せて、見る間に土砂降りになつて来た雨も気がつかないらしく、無言で歩き続けました。

その内に御影の狛犬が向い合つている所まで来ると、やつと泰さんが顔を挙げて、「ここが一番安全だつて云うから、雨やみ旁々この中で休んで行こう。」と、二人の方を振り返りました。そこで皆一つ傘の下に雨をよけながら、積み上げた石と石との間をぬけて、ふだんは石切りが仕事をする所なのでしよう。石河岸の隅に張つてある蓆屋根の下へは入りました。その時は雨も益々凄じくなつて、豎川を隔てた向う河岸も見えないほど、まつ白にたぎり落ちていましたから、この一枚の蓆屋根くらいでは、到底洩らずにすむ訣もありません。のみならず、霧のような雨のしぶきも、湿つた土の匂と一しよに、濛々と外から吹きこんで来ます。そこで三人は蓆屋根の下にはいりながらも、まだ一本の蛇の目を頼みにして、削りかけたままになっている門柱らしい御影の上に、目白押しに腰を下しました。と、すぐに口を切つたのは新蔵です。「お敏、僕はもうお前に逢えないかと思つていた。」——こう云う内にまた

雨の中を斜に蒼白い電光が走つて、雲を裂くように雷が鳴りましたから、お敏は思わず銀杏返しを膝の上へ伏せて、しばらくはじつと身動きもしませんでした。したが、やがて全く色を失つた顔を挙げると、夢現のような目なごしをうつとりと外の雨脚へやつて、「私ももう覚悟はして居りました。」と気味の悪いほど静に云いました。心中——そう云う穩ならぬ文字が、まるで燐りんでも書いたように、新蔵の頭脳へ焼きついたのは、実にこのお敏の言葉を聞いた、瞬間だったと云う事です。が、二人の間に腰を据えて、大きく蛇の目をかざしていた泰さんは、左右へ当惑そうな眼を配りながら、それでも声だけは元氣よく、「おい、しつかりしなくつちやいけないぜ。お敏さんも勇氣を出すんです。得てこう云う時には死神が、とつ着きたがるものですからね。——そりやそうと今来ているお客は、鍵惣かぎそうつて云う相場師そうばしでしょう。ええ、私もちよいと知つてゐるんです。あなたを妾めかけにしたいつて云うのは、あの男じやないんですか。」と、早速實際的な方面へ話を移してしまいました。するとお敏も急に夢から覚めたように、

涼しい眼を泰さんの顔に注ぎながら、「ええ、あの人などでございます。」と、口惜しそうに答えたそうです。「それ見給え。やつぱり僕の見込んだ通りじやないか。」——こう云つて泰さんは、得意らしく新蔵の方を見返りましたが、すぐにまた真面目な調子になつて、勉いたわるようにお敏の方へ向いながら、「この降りじや、いくら鍵惣でもまだ二十分や三十分は御宅にいでるでしょう。その間に一つ、私の計画がどうなつたか話して聞かせて下さい。もし万事休したとなりや、男は當つて砕くだけるだ。私がこれから御宅へ行つて、直接鍵惣に懸合つて見ますから。」と、新蔵の耳にも頼母たのもしいほど、男らしく云い切りました。その間も雷はいよいよ烈しくなつて、昼ながらも大幅な稲妻が、ほとんど絶え間なく瀧のような雨をはたいていましたが、お敏はもうその悲しさをさええ忘れるくらい、必死を極めていたのでしよう。顔も美しいと云うよりは、むしろ凄あやいようなけはいを帯びて、こればかりは変らない、鮮あやな唇を震わせながら、「それがみんな裏を搔かれて、——もう何も彼も駄目でございますわ。」と、細く透る声

で答えました。それからお敏が、この雷雨の蓆屋根の下で、残念そうに息をはずませながら、途切れ途切れに物語った話を聞くと、新蔵の知らない泰さんの計画と云うのは、たった昨夜一晚の内に、こんな鋭い曲折を作つて、まんまと失敗してしまつたのです。

泰さんは始新蔵から、お島婆さんがお敏へ神を下して、伺いを立てると云う事を聞いた時に、咄嗟に胸に浮んだのは、その時お敏が神憑りの真似をして、あの婆に一杯食わせるのが一番近道だと云う事でした。そこで前にも云つた通り、家相を見て貰うのにかこつけて、お島婆さんの所へ行つた時に、そつとその旨を書いた手紙をお敏に手渡して来たのです。お敏もこの計画を実行するのは、随分あぶない橋を渡るようなものだとは思いましたが、何しろ差当つてそのほかに、目前の災難を切り抜ける妙案も思い当りませんから、明るる日の朝思い切つて、「しようちいたしました」と云う返事を泰さんに渡しました。ところがその晩の十二時に、例のごとくあの婆が豎川の水に浸つた後で、いよいよ婆婆羅の

神を祈り下し始めると、全く人間業では仕方のない障害のあるのを知つたのです。が、その仔細を申し上げるのには、今の世にあらうとも思われぬ、あの婆の不思議な修法の次第を御話して置かなければなりませんまい。お島婆さんはいざ神を下すとになると、あろう事かお敏を湯巻一つにして、両手を後へ括り上げた上、髪さえ根から引きほどいて、電燈を消したあの部屋のまん中に、北へ向つて坐らせるのだそうです。それから自分も裸のまま、左の手には裸蝸蠟をともし、右の手には鏡を執つて、お敏の前へ立ちはだかりながら、口の内に秘密の呪文を念じて、鏡を相手につきつけつけ、一心不乱に祈念をこめる——これだけでも普通の女なら、氣を失うのに違いありませんが、その内に追々呪文の聲が高くなつて来ると、あの婆は鏡を楯にしながら、少しづつじりじり詰めよせて、しまいには、その鏡に気圧されるのか、両手の利かないお敏の体が仰向けに畳へ倒れるまで、手をゆるめずに責めるのだと云う事です。しかもこうして倒してしまつた上で、あの婆はまるで屍骸の肉を食う爬虫類のように這い

寄りながら、お敏の胸の上へのしかかつて、裸蠟燭の光が落ちる気味の悪い鏡の中を、下からまともないつまでも覗かせるのだと云うじやありませんか。するとほどなくあの婆娑羅の神が、まるで古沼の底から立つ瘴気のように、音もなく暗の中へ忍んで来て、そつと女の体へ乗移るのでしょうか。お敏は次第に眼が据つて、手足をびくびく引き攣らせると、もうあの婆が口忙しく畳みかける間に応じて、息もつかずに、秘密の答を饒舌り続けると云う事です。ですからその晩もお島婆さんは、こう云う手順を違えずに、神を祈下そうとしましたが、お敏は泰さんとの約束を守つて、うわべは正気を失つたと見せながら、内心はさらに油断なく、機会さえあれば真しやかに、二人の恋の妨げをするなど、膺の神託を下す心算でいました。勿論その時あの婆が根掘り葉掘り尋ねる問などは、神慮に叶わない風を装つて、一つも答えない事にきめていたのです。ところが例の裸蠟燭の光を受けて、小さいながら爛々と輝いた鏡の面を見つめていると、いくら氣を確かに持とうと思つていても、自然と心が恍惚として、いつとな

く我を忘れそうな危険に脅され始めました。そうかと云つて、あの婆は、呪文を唱える暇もぬかりなく、じつとこちらの顔色を窺いすましているのですから、隙を狙つて鏡から眼を離すと云う訣にも行きません。その内に鏡はお敏の視線を吸いよせるように、益々怪しげな光を放つて、一寸ずつ、一分ずつ、宿命よりも氣味悪く、だんだんこちらへ近づいて来ました。おまけにあの青んぶくれの婆が、絶え間なく呟く呪文の声も、まるで目に見えない蜘蛛の巣のように、四方からお敏の心を搦んで、いつか夢とも現ともわからない境へ引きずりこもうとするのです。それがどのくらいかかったか、お敏自身も後になつて考えたのでは、臙げな記憶さえ残っていません。が、ともかくも自分には一晩中とも思われるほど、長い長い間続いた後で、とうとうお敏は苦心の甲斐もなく、あの婆の秘法の穿に陥れられてしまったのでしよう。うす暗い裸蠟燭の火がまたたく中に、小ささまさまの黒い蝶が、数限りもなく円を描いて、さつと天井へ舞上つたと思うと、そのまま目の前の鏡が見えなくなつて、いつもの通り死人も

同様な眠に沈んでしまいました。

お敏は雷鳴と雨声との中に、眼にも唇にも懸命の色を漲みなぎらせて、こう一部始終を語り終りました。さつきから熱心に耳を傾けていた泰さんと新蔵とは、この時云い合せたように吐息といきをして、ちらりと視線を交せましたが、兼て計画の失敗は覚悟していても、一々その仔細しさいを聞いて見ると、今度こそすべてが画餅がへいに帰したと云う、今更らしい絶望の威力を痛切に感じたからでしょう。しばらくは二人とも唾おしのように口を噤つぶんだまま、天を覆して降る豪雨の音を茫然とただ聞いていました。が、その内に泰さんは勇気を振り起したと見えて、今まで興奮し切っていた反動か、見る見る陰鬱になり出したお敏に向つて、「その間の事は何一つまるで覚えていないのですか。」と、励ますように尋ねたそうです。と、お敏は眼を伏せて、「ええ、何も——」と答えましたが、すぐにまた哀訴するような眼なごしを恐る恐る泰さんの顔へ挙げて、「やつと正気になりました時には、もう夜が明けて居りましたんです。」と、怨めしそうにつけ加えると、急に袂たもとを顔へ当てて、忍び泣きに

咽むせび入りました。そう云う内にも外の天気は、まだ晴れ間も見えないばかりか、雷は今にも落ちかかるかと思うほど、殷々いんいんと頭上に轟き渡つて、その度に瞳を焼くような電光が、しつきりなく葎屋根むしりやねの下へも閃ひらめいて来ます。すると今まで身動きもしなかつた新蔵が、何と思つたか突然立ち上ると、凄じく血相けつそうを変えたまま、荒れ狂う雨と稲妻との中へ、出て行きそうにするじゃありませんか。しかもその手には、いつの間にか、石切りが忘れて行つたらしい鑿のみを掲さげているのです。これを見た泰さんは、蛇の目をそこへ抛り出すが早いか、やにわに後から追いつがつて、抱くように新蔵の肩を抑えました。「おい、気でも違つたのか。」——思わずこう泰さんは怒鳴りつけながら、無理に相手を引き戻そうとすると、新蔵は別人のように上ずつた声で、「離してくれ給え。もうこうなりや、僕が死ぬか、あの婆を殺すかよりほかはないんだ。」と、夢中で喚わめき立てるのです。「莫迦ばかな事をするな。第一今日は鍵惣かぎそうも来合せていると云うじゃないか。だから僕が向うへ行つて——」「鍵惣が何だ。お敏を妾めかけにしようと云うやつ

が、君の頼みなんぞ聞くものか。それよりか僕を離してくれ給え。よ、友達甲斐に離してくれ給えつたら。「君はお敏さんの事を忘れたのか。君がそんな無謀な事をしたら、あの人はどうするんだ。」——

二人がこう揉み合っている間に、新蔵は優しい二つの腕が、わなわな震えながらも力強く、首のまわり懸つたのを感じました。それから涙に溢れた涼しい眼が、限りなく悲しい光を湛えて、じつと彼の顔に注がれているのを眺めました。最後に大雨の音を縫つて、ほとんど聞きとれないほどかすかな声が、「御一しよに死なせて下さいまし。」と、囁いたのを耳にしました。と同時に近くへ落雷があつたのでしよう。天が裂けたような一声の霹靂と共に紫の花が眼の前へ散乱すると、新蔵は恋人と友人とに抱かれたまま、昏々として気を失つてしまいました。それから何日か経つた後の事です。新蔵はやつと長い悪夢に似た昏睡状態から覚めて見ると、自分は日本橋の家の二階で、氷嚢を頭に当てながら、静に横になっていました。枕元には薬罌や検温器と一しよに、小さな朝顔の鉢があつて、しおらしい瑠璃

色の花が咲いていますから、大方まだ朝の内なのでしよう。雨、雷鳴、お島婆さん、お敏、——そんな記憶をぼんやり辿りながら、新蔵はふと眼を傍へ転ずると、思いがけなくその葭戸際には、銀杏返しの鬢がほつれた、まだ頬の色の蒼白いお敏が、気づかわしそうに坐っていました。いや、坐っているばかりか、新蔵が正気に返つたのを見ると、たちまちかすかに顔を赤らめて、「若旦那様、御気がつきなさいましたか。」と、つつましく声をかけたじやありませんか。「お敏。」——新蔵はまだ夢を見ているような心もちで、こう恋人の名を呟きましたが、その時また枕もとで、「まあ、これでやつと安心した。——おつと、そのまま、そのまま、なるべく静にしていなくつちやいけないぜ。」と、これもやはり思いがけない泰さんの声が聞えました。「君もいたのか。」「僕もいるしき。君の阿母さんもここに御出でなさる。御医者様は今し方帰つたばかりだ。」——こんな問答を交換しながら、新蔵は眼をお敏から返して、まるで遠い所の物でも見るように、うつとりと反対の側を眺めると、成程泰さんと母親とが、

ほつとしたような顔を見合せて、枕もとに近く坐っています。が、やっと正気に返った新蔵には、あの恐しい大雷雨の後、どうして日本橋の家へ帰つて来たのか、さらにそう云う消息がのみこめませんでした。しばらくはただ茫然と三人の顔ばかり眺めていました。が、その内に母親は優しく新蔵の顔を覗きこんで、「もう何事も無事に治まったからね、この上はお前もよく養生をして、一日も早く丈夫な体になつてくれなけりやいけませんよ。」と、勦くだわるように言葉をかけました。すると泰さんもその後から、「安心して給え。君たち二人の思が神に通じたんだよ。お島婆さんは鍵惣かぎそうと話している内に、神鳴りに打たれて死んでしまった。」と、いつもよりも快活に云い添えるのです。新蔵はこの意外な吉報を聞くと同時に、喜びとも悲しみとも名状し難い、不思議な感動に蕩揺とうようされて、思わず涙を頬に落とすと、そのまま眼をとぎしてしまいました。それが看護をしていた三人には、また失神したとても思われたのでしよう。急に皆そわそわ立ち騒ぐようなけはいがし出しましたから、新蔵はまた眼を開くと、腰を浮

かせかけていた泰さんが、わざと大袈裟おおげさに舌打ちをして、「何だ。驚かせるぜ。——御安心なさい。今泣いた鳥がもう笑っています。」と、二人の女の方をふり返りました。実際新蔵はもうこの世の中にあるの怪しい婆の影がささなくなつたのだと考えると、自然と微笑が唇に浮んで来るのを感じたのです。それからまたしばらくの間、この幸福な微笑を楽しんで、新蔵は泰さんの顔へ眼をやりながら、「鍵惣は？」と尋ねました。と、泰さんは笑いながら、「鍵惣か。鍵惣は目をまわしたただけだった。」と云つて、何故かちよいとためらつたようでしたが、やがて思い直したらしく、「僕は昨日見舞に行つて、あの男自身の口から聞いたんだがね。お敏さんは神を下された時に、君たち二人の恋の邪魔じゃまをすれば、あの婆の命に聞ると、繰返し繰返し云つたそうだ。が、あの婆は狂言だと思つたので、明くる日鍵惣が行つた時に、この上はもう殺生せつしょうな事をして、君たち二人の仲を裂くとか、大いに息まいていたらしいよ。して見ると、僕の計画は、失敗に終つたのに違いないんだが、そのまた計画通りの事が、実際は起つてい

たんだらうじやないか。しかしお島婆さんがそれを狂言だと思つた揚句、とうとう自滅したなんぞでは、どう考えても予想外だね。これじや婆娑羅の神と云うのも、善だか悪だかわからなくなつた。」と、怪訝そうに話して聞かせるのです。こう云う話を聞くにつけても、新蔵はいよいよこの間から、自分を掌中に弄んだ、幽冥の力の怪しさに驚かないではいられませんでしたが、たちまちまた自分はあの雷雨の日以来、どうしていたのだらうと思ひ出しましたから、「じや僕は。」と尋ねますと、今度はお敏が泰さんに代つて、「あの石河岸からすぐ車で、近所の御医者様へ御つれ申しましたが、雨に御打たれなすつたせいか、大層御熱が高くなつて、日の暮にこちらへ御帰りになつても、まるで正気ではいらつしやいませんでした。」と、しみじみした調子で口を添えました。これを聞くと泰さんも、満足そうに膝をのり出して、「その熱がやつと引いたのは、全く君のお母さんとお敏さんのおかげだよ。今日でまる三日の間、讒言ばかり云つている君の看病で、お敏さんは元より阿母さんも、まんじりとさえなさない

んだ。もつともお島婆さんの方は、追善心に葬式万端、僕がとりしきつてやつて来たがね。それもこれも阿母さんの御世話になつていない物はないんだよ。」と、末は励ますように述べ立てるのです。「阿母さん。難有う。」「何だね、お前、私より泰さんに御礼を申し上げなくつちや。」——こう云う内に親子とも、いや、お敏も、泰さんも、皆涙を浮べていました。が、泰さんは男だけに、すぐ元気な声を出して、「もうかれこれ三時でしょう。じや私は御暇しますかな。」と、半ば体を起しかけると、新蔵は不審そうに眉をよせて、「三時？ 今はまだ朝じやないのかい。」と、妙な事を尋ねるのです。呆氣にとられた泰さんは、「冗談云つちやいけない。」と云いながら、帯の間の時計を抜いて、蓋を開けて見せそうにしましたが、ふと新蔵の眼が枕もとの朝顔の花に落ちてゐるのを見ると、急に晴れ晴れした微笑を浮べて、こんな事を話して聞かせました。「この朝顔はね、あの婆の家にいた時から、お敏さんが丹精した鉢植なんだ。ところがあの雨の日に咲いた瑠璃色の花だけは、奇体に今日まで凋まないんだよ。お敏

さんは何でもこの花が咲いている限り、きつと君は本復するに違いないつて、自分も信じりや僕たちにも度々云つていたものなんだ。その甲斐かがあつて、君が正気に返つたんだから、同じ不思議な現象にしても、これだけはいかにも優しいじゃないか。」

(大正八年九月二十二日)

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 12 月 1 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 4 月 1 日第 8 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号-86）を、大振りにつけています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998 年 12 月 8 日公開

2004 年 3 月 13 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。